

人里のニエスレタ

日本ホテルの会 1999 / 8 第12号

人里に流れる桐生川

日本ホテルの会理事 川村善治

桐生川は全長約 30km で、上流は群馬県と栃木県の境界の谷間を流れる溪流である。途中梅田湖があり、この川は桐生市の東側を流れ、渡良瀬川に流れ出る。源流は巾 5m 前後で大きな岩がごろごろある。冬は雪で入る事ができない。春になると雪も解け、沢からの湧水も多くなり、この水を飲むと冷たくて実にうまく甘く感じるのだ。この辺には幻の魚が生息している。サケ科のイワナという魚で大きさは 10～20cm で大きいものは 30cm 以上のもある。大変警戒心が強い。

人里近くなると川巾は 10～15m も広くなり、源流と違って平坦なところが多くなる。川の流れも数カ所に分かれ、石の間を流れ下る泡の音も大小ことなり、まるで合唱している様に聞こえる。この辺になると川の魚も、ヤマメ、イワナ、ハヤ、カジカ、ウナギと種類も多くなる。川に沿って道路があるが、道巾は自動車一台通る位だ。3月20日からまちにまった溪流の解禁である。私は朝5時ごろ出かける車で約30分走ると谷間の周囲の山は若葉に変わる。朝霧がだんだん消えて行くと上空の青空が一段

と美しく見える。解禁から2～3日は、ヤマメやイワナも腹がへっているのか餌食いがよく、実に良く釣れる。エサはブドウ虫かイクラで、脈釣りである。朝日が上がってくると溪流の音にまじって鈴を鳴らした様な音で高音でさえずる声は、まるでカンターテナーの様である。この小鳥は全体が濃い茶色でメジロくらいの大きさの小さい鳥である。ミソサザイと言う、さえずる間、尾の羽を上げ全身をふるわせて鳴くのだ。若葉の谷間いっぱい響き渡る高音の声、その光景はまるでファンタジー的な前奏曲を感じさせる実に素晴らしい。他にも色々な小鳥が周囲で合唱している。

私は中学時代から野鳥がすきで、いろいろの小鳥を餌づけてきた。特に正月にはウグイスをホーホケキョウと鳴かすのが得意だ。しかし、ミソザザイだけは難しく餌付けることが出来なかった。

私の住んでいる所は桐生川の中流付近である。人家も少ない所で、家から川までは 20m はなれている。この辺になると川の巾も 30m 前後と広くなる。梅田湖ができてからは、川岸に土砂も多くなり、色々の雑草

が生え、中には山菜のワラビ、コゴミ、山ウド、セリ、ミツバ、クレソンなどもある。桐生は山が近くにあり山菜の宝庫だ。特に山ウド、サンショウ、タラの芽、アブラコシ、キノシタなどは天ぷらにすると最高に美味である。川魚ではヤマメはフライが良く、イワナは塩焼きが大変うまい。

7月になるとアユが解禁になる。桐生川のアユは他のアユに比較すると一段と美味で有名である。アユが食べる川石の苔が他より良いのであろう。また、川虫も数多く生息している。水の流れの弱い所には青タニシ、カワニナも多く見られるこの様な所は数カ所あって、6月の始めごろよりゲンジボタルが出現し6月中旬には数多く飛び回る。私の住まいの近くの川にもゲンジボタルが多く生息している。ここに住んで早くも6年になるが、昔はホタルが沢山いたと近所の人の話である。

ホタルの発生する場所は川岸の土手が竹

藪の茂った所、またはセメントが入っていない石垣の場合にも発生する。私も時々夜8時ごろ、自動車で川岸の道路を通るとき、車を止めライトを消し竹藪をのぞくと、川の上にいるわいるわゲンジボタルが強い光をだして飛び回っている。しばらく観察していると、2~3mの間隔で飛んでいる。けして遠くにはいかない。近くにも河川があるのだが、そちらにはいない。不思議である。童話にある様にホーホーホタルこい、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、とお互いに話し合っている様にみえる。ここの川はよっぽど甘いのであろう桐生川のホタルの場所は毎年決まった所である。月のでない闇夜は一段と光が強くみえる。川のせせらぎの音と交じりあってホタルの光は夜のファンタジーといえよう。

桐生川は動植物の宝庫であり、川をきれいに、何時までも人々の憩いの場所になれるように大切にしたいものである。

ホタル保護指導員講習会について

新潟県ホタルの会会長 中川七三郎

1. ホタル保護指導員講習会の主旨

新潟県では山あり、田ありで面積も広く、昔から各地でゲンジボタル、ヘイケボタルが見られたが、環境の変化につれて生息地もまた飛ぶホタルの数も少なくなってきた。そこで生息地を保護するために、平成元年、有志17名で新潟県ホタルの会を結成し、平成6年から各地域のホタルの会のリーダーとして活動する人、また自然観察教材としてホタルの人工飼育を希望する小、中学校へ指導、助言で協力する人を対象に、毎年1回ホタル保護指導員講習会を

開催している。以下にその概要について述べる。

2. 講習内容（平成10年度）

1) 期日 平成10年6月19日~21日

期日、期間の設定に際しては受講者が講習会終了後、まだゲンジボタル、ヘイケボタルの成虫が飛んでいて、それを使い産卵、幼虫の飼育ができるように期日を決め、夜はホタルの飛ぶ状況を観察し、生息地の環境を見学するために生息地近くの旅館で宿泊するように配慮した。

2) 講義内容と講師

ホタルの生態、飼育、生息環境に関して
は大場信義先生他、地域の研究者が担当す

る。ホタルの生息地をとりまく自然環境に
ついては、地質、森林、水質等各部門の専
門研究者にお願いした。

Ⅰ. 地域環境の保全

Ⅱ. 新潟県の自然 Ⅰ 森と水、森の生き物たち

Ⅲ. 新潟県の自然 Ⅱ イトヨの巣づくり

Ⅳ. 新潟県の自然 Ⅲ 地質から見た自然

Ⅴ. ホタルの観察

Ⅵ. ホタルの分類と生態

Ⅶ. ホタルの生息環境と飼育

Ⅷ. 水質汚染の観察と測定

新潟県環境生活部環境企画課	山本 進一
森林インストラクター	本間 英樹
新潟かぎろひの会会長	小島 範夫
新潟大学名誉教授	芽原 一也
横須賀市自然博物館学芸員	大場 信義
新潟県ホタルの会副会長	永島 和人
新潟県ホタルの会会長	中川七三郎
新潟薬科大学教授	及川紀久雄

3) 指導員講習会応募資格、定員

20才以上の方で自然保護、ホタル保護に
関心のある方。30名。

4) 費用 35000 円 (受講料、宿泊費含む)

3. おわりに

現在までに5回の講習会で94名のホタル
保護指導員を養成し、各地ホタルの会で
リーダーとして活躍しているが、回を重ね
るにつれて受講者が少なくなる傾向があ
り、目下講習期間を土曜日、日曜日の1泊
2日とし、講習修了者でホタル保護指導会
をつくり、年1回情報交換、生息地見学会
で研修する方法を検討しているところで
す。



ホタル人工飼育実習

人里のギンヤンマ

～実は2種類いる～

日本蜻蛉学会 川島逸郎

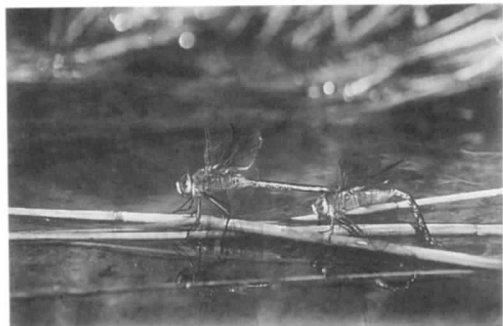
「ギンヤンマ」といえば、多くの方は夏の
陽ざしがきらきら照りつける池の水面や、
田んぼが延々と並ぶ田園風景を思い起こす
ことでしょう。年輩の方にとっては、この
トンボに対して、子供の頃の沢山の思い出

がつまっているかも知れません。日本人に
としてはそれほどにこのトンボは有名で、
ホタルでいえばゲンジボタルやヘイケボタル
といった所でしょうか。ひととの関わり
もそれだけに深く、全国各地での呼び名・

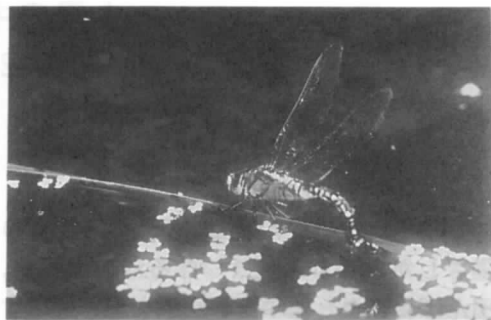
方言は数知れず、この点でもそれらのホタルと似ています。とりわけ古くから「トンボ釣り」など、子供文化のなかに浸透し、その採集方法や道具の工夫の多様さは、人文科学の面から見ても非常に興味のある対象といえるでしょう。

その「ギンヤンマ」、実は日本には4種類も生息しています。内2種は琉球列島から東南アジアにすむ種類ですが、私たちの身近にも実は2種類すんでいます。普通ため池や水田の上を飛び回って目に付くのが本家本元のギンヤンマですが、ひっそりと慎ましく暮らしているのがクロスジギンヤンマです。東京都内の住宅地にも見られることがあり、場所によってはギンヤンマより多いかも知れません。(因みに私は田園調布駅前でバスを待っていた時、目の前の金魚池に産卵しに飛んできたメスを観察することがあります。)名前が示す通り、緑色の胸の側面に2本の目立った黒線がありすぐに見分けがつきます。雄の腰が青いのは同じですが、目玉と腹の斑紋も真っ青で、日本のトンボのなかでも有数の美しさです。クロスジギンヤンマを手にしてからトンボに夢中になってしまった人も少なくありません。それほど美しさ・多さにも関わらず一般的にあまり知られていないのには、何か原因がありそうです。その原因とは、実はこのヤンマの現れる時期と生息する水

辺環境にあります。ギンヤンマは夏から秋にかけて現れ、その間だらだらと羽化し続ける一方、本種は4月半ばには羽化が始まり5月半ばにはほとんど羽化し終わります。成虫は5月から6月にかけて水辺に現れ、夏までにはほとんど姿を消してしまいます。またギンヤンマとは大きく異なり、ひらけた明るい池ではなく薄暗く狭い水たまりを好むのです。大抵の方は、そんな早い時期に大型のヤンマがみられるとは思わないうえ、生息環境が人目にふれにくいということから、案外見過ごされていることが多いようです。類縁からみれば両者はとても近いのですが、面白いことに違いはさらに目立った行動にもあらわれています。ギンヤンマといえば「おつながり」、昔の子供たちにとっては、一匹で飛んでいる時には手も足も出なかったオスを、オトリになるメスとともにつかまえる絶好のチャンスだったといえます。ほかけとよばれたリング状の交尾をすませたつがいは、離れることなく連結したまま産卵を開始します。オスがメスを離すことなく連結したままで行くのは、産卵に熱中しているメスを外的から見張ることもありますが、他のオスにメスを奪われることなく産卵させるためでもあります。開けて目立ちやすい水辺にあっては、ギンヤンマのオスにとっては、どちらも大切な仕事なのでしょう。ところがク



ギンヤンマの連結産卵



クロスジギンヤンマの単独産卵

ロスジギンヤンマのオスは全くそのような行動をとりません。交尾が終わればつがいはさっさと離れ、メスは物陰などで単独で産卵するのです。見通しの悪い水辺にすむために、わざわざオスが産卵するメスを保護する必要がないということなのでしょう。交尾はどちらも植物に止まって行われますが、ギンヤンマは草などの低い所にも簡単に静止する一方、クロスジギンヤンマでは交尾すると一気に樹上に上がってしまうため、ほとんど観察不可能です。生息環境にあわせた？こうした違いが親戚のような両者の間に見られることは大変面白いと思います。ちなみに、ヤンマ類の習性としてはクロスジギンヤンマの方が一般的で、私たちになじみ深いギンヤンマの方がむしろ特殊で、派生的な習性が強いといえます。

最近、心なごむ人里環境が消えていくに

つれて、自然の復元再生の試みが各地でなされるようになりました。「ホタル水路」と並んで「トンボ池」が注目され、実践されています。昆虫の中では、ホタルと共にトンボは基礎的な生態的知見が蓄積されていることもあってか、かなり具体的な成果が上がっていることも多いようです。今回ここに取り上げたギンヤンマ・クロスジギンヤンマはどちらも、新しく造られたトンボ池に最初に侵入してくるおなじみの顔ぶれで、ここでもそのたくましさを垣間みることができます。一方ではどんなに人の目から見てそれらしく水辺を整えてやっても全く”住みついてくれない”種類のトンボもいることも事実で、大多数の昆虫類・小動物なども含めて、今後は”自然環境の復元再生”の限界を知ることの模索も、同時に考えていく必要があるのではないのでしょうか。

平成11年度 日本ホタルの会シンポジウムのお知らせ

日本ホタルの会では、例年「ホタルを通じて身近な自然を考える」と題しましてシンポジウムを開き、昨年度で第7回を数えるまでになりました。本年度も10月12日(火)、東京都目黒区三田の東京都写真美術館におきまして第8回シンポジウムの開催を予定しております。内容の詳細につきましては、確定次第ご通知申し上げます。

寄贈図書・資料の紹介

「私たちのホタルー身近な水環境調査ー10号」(水と文化研究会・滋賀県志賀町)

「谷戸だより」(山崎の谷戸を愛する会・神奈川県鎌倉市)

「鉢ヶ峯の自然を守る会ニュースレター」(鉢ヶ峯の自然を守る会・大阪府堺市)

いずれも各地域に根ざした自然環境保全活動を実践されている会で、きわめて具体的な活動内容とその歩み、地域固有の自然や人との関わりが毎号満載されています。ご寄贈いただいたこれらの資料は事務局に保管されております。

理事会報告

4月16日(金)および7月16日(金)に理事会を行いました。そして、今年度の会誌・ニュースレターの編集方針の検討、会員区分の再整理およびサービスに見合った年会費の見直し、会則の改正、シンポジウムの具体的内容についての検討がなされました。

会員区分につきましては、これまでの個人会員とホタル会員の区分をなくし、個人会員として統合することになりました。ホタル会員の方々には個人会員として再登録して頂けるかどうかご確認の書類をお送り致します。また、年会費につきましては、今年度から以下のように変更することになりました。

法人会員 100,000 円

団体会員 30,000 円

個人会員 4,000 円

日本ホタルの会 役員

会長 矢島 稔

理事長 佐々 学

理事 川村善治, 小西正泰, 高山房二, 林 長閑, 円谷哲男, 本多和彦, 常喜 豊

研究員 後藤好正, 鈴木浩文, 佐藤安志, 川島逸郎, 渋谷桂子

人里へのニュースレター 第12号 平成11年8月20日発行

編集 日本ホタルの会 ニュースレター編集事務局

発行 日本ホタルの会

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-13

大一ビル2F

TEL・FAX 03-3498-3345



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

印刷 プリントランド・スガイ

〒239-0815 神奈川県横須賀市浦上台2-27-936

TEL 0468-43-1356 FAX 0468-43-1366
